



監督＝篠原哲雄／原作＝浅田次郎『地下鉄に乗って』（講談社文庫、徳間文庫刊）／出演＝堤真一／岡本綾／常盤貴子／大沢たかお／田中泯／笹野高史／北条隆博／吉行和子（ギャガ・コミュニケーションズ、松竹配給／2006年日本映画／121分）

……待望されていた浅田次郎作品の映画化だが、これだけ頻繁にタイムスリップされると話がややこしくなりすぎて、收拾が困難に……？ また東京タワー、東京オリンピックは「懐かしき昭和」の全国ネットだが、東京の地下鉄はあくまで東京版で、地方の人たちには昭和を代表する象徴ではない。したがって、戦後の闇市のセットの見事さや大沢たかお、常盤貴子の熱演は認めるものの、ストーリーとしてチグハグな面が目立つのが残念。ちなみにこれは原作のせいではなく、すべて監督の責任だが……。

## 浅田次郎の出世作の映画化だが……

直木賞作家浅田次郎の作品は『鉄道員』（99年）、『壬生義士伝』（03年）など、次々と映画化されている。この映画の原作となった『地下鉄に乗って』は1995年に吉川英治文学新人賞を受賞した彼の出世作で、映画化が待望されていたものだが、なぜかそれが実現しなかった。パンフレットにあるプロデューサー小滝祥平の「原作≧脚本ということ。」を読めば、「5年に渡り企画を進めていたが、なかなか実現しなかった」のは、「この小説は出来が良すぎる」ためらしい……。

そこには多少お世辞も入っているだろうから、私なりにその原因を考えれば、やはりタイムスリップものの映画化は難しいということ……。そのうえ、昨年戦後60年という節目を迎えたわが国は、小泉改革のおかげ(?)で何とか経済を持ち直し、少しは昭和の良き時代を懐かしむという余裕が生まれたこともあって、『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）が大ヒットしたため、それと同じように東

京オリンピックが開催された昭和39年にタイムスリップするというのは、「二番煎じ」という警戒があったのでは……？ 事前勉強した知識ではかなり大きな期待を持って映画館に行ったのだが、上記2つの私の不安がかなりの中。いい映画に仕上がっていると思うものの、他方ではかなりの不満も……。

## 東京生まれの人でなければ……

『ALWAYS 三丁目の夕日』が昭和の象徴として、昭和33年に建設された東京タワーに注目したのは大成功した。それと同じように、この映画が主人公をまず最初に昭和39年の東京オリンピックの時代にタイムスリップさせたのは大正解だが、実はオリンピックそのものの姿はこの映画には全く登場しない。この映画で昭和を象徴するものとして登場するのは、そのタイトルどおり「地下鉄(メトロ)」。

パンフレットには、映画評論家渡辺祥子氏の「私の思い出の『地下鉄に乗って』』という解説があり、昭和39年当時の営団地下鉄の路線図が載っているが、東京の地下鉄にあまり乗ったことがない私にはチンプンカンプンだし、路線名、駅名についても何の思い出も愛着もない。昭和30年代に東京に住み、路面電車が廃止され地下鉄網が整備されていく姿を目の当たりにした人は地下鉄への興味が深く、懐かしい思い出もいっぱいあるだろうが、地方出身の人たちにはそれは全然わからないもの。したがって、1951年に東京都に生まれた浅田次郎氏にとっては「地下鉄」は昭和30年代を懐かしく思い出させる原動力であるかもしれないが、それを東京タワーや東京オリンピックと同じように、地方の人々にも求めるのはいかがなものか……。これって実は、東京に住んでいる人が東京と地方の格差を理解できないことのあらわれでは……？

## 最初のタイムスリップは……？

長谷部真次(堤真一)は今43歳。小さな女性下着メーカーの営業マンだから、旅行用によく使う大きなトランクを引っ張りながら歩いている。もっとも、このトランクの中に入っているのは営業用に使う下着ばかりだから、それほど重くはないはず……。一見真面目そうな真次だが、実は妻子ある立場ながら、社内で事務をとっている軽部みち子(岡本綾)と不倫関係にあり、みち子のマンションに

足しげく通っている。そんな真次がタイムスリップすることになったのは、①出張帰りの道でルス電を聞くと、そこに三男坊の弟から父小沼佐吉（大沢たかお）が倒れたとのメッセージが入っていたこと、②地下鉄の駅で学校の恩師野平啓吾（田中泯）と偶然出会い、奇妙なアドバイスを受けたこと、そして③到着した駅の構内で若くして死亡した長男である兄の小沼昭一（北条隆博）の姿（？）を見つけたこと。この3つが原因……？

思わず兄の後を追いかけて地下鉄の出口から外に出てみると、そこには『東京五輪音頭』をかき鳴らしながら歩いているちんどん屋がおり、風景一帯が昭和のあの時代……。これは一体ナニ……？

## 時代設定をしっかりと……

パンフレットには「平成から昭和へー」という見出しがある。真次がタイムスリップしたのは昭和39（1964）年。そこで言葉を交わした若者が持っていた「東京オリンピックいよいよ開催」という見出しが踊る新聞の日付は、昭和39年10月5日。それはそれでいいのだが、すると今43歳の真次が生きているのは平成何年……？ それがこの映画ではわからないから、一瞬間の中が混乱するはず……？

他方、スクリーン上には小沼家の3人兄弟が、仲良く新しく開通した新中野駅へ地下鉄見学に出かけ感動するシーンが登場するが、この時次男の真次は中学生くらい。そしてパンフレットによれば「地下鉄開通当時—昭和37年の新中野駅」とあるから、このシーンは昭和37年頃のはず。したがって仮に、43歳の真次が生きている平成の時代が2006（平成18）年だとすると、1964年は42年前だから全く話が合わないことになる。

『地下鉄に乗って』の初版が出版されたのがいつかは知らないが、1995年に第16回吉川英治文学新人賞を受賞したのだから、多分その数年前だろう。すると、真次が今生きているのは1991（平成3）年から1993（平成5）年頃のこと……？

こんな疑問を持った私が、映画鑑賞後ネットで調べてみると、同じような疑問を持った人がおりいろいろと解説しているので、興味のある方はそれらを是非参照してもらいたい。しかし観客にこんな疑問を持たせるのは、この映画の時代設定がしっかりしていないせい……。まずそこはしっかりしてもらわなくちゃ……。

## なぜ真次は小沼ではなく長谷部姓を……？

真次が長谷部姓を名乗っているのは、彼の説明によれば「おやじと縁を切った」「籍も抜いた」ということだが、弁護士の私にはその意味が全く理解できなかった。なぜなら、父親と子供の関係はいくら父親が嫌いになったとしても、子供から自由に籍を抜いたり氏を変更したりすることはできないからだ。

「子の氏の変更」が許されるのは、両親が離婚し、母親が旧姓に戻ったなど同居生活上支障があるなど子の福祉にかなわない状態となった場合だけ。映画の中では、真次が妻子と共に母親と同居している姿が描かれるが、ストーリー上この母親が佐吉と離婚したという説明は何もない。しかしパンフレットを読むと、母親役の吉行和子は長谷部民枝と紹介されていたから、やはり離婚していたのだとわかり、それによってはじめて真次の姓が長谷部であることにも納得。そうすると、真次のいかにも自分の意思で小沼の戸籍を抜いたかのような説明はおかしいもので、「母親が離婚して旧姓に戻ったので、俺もこの際母親の姓に変えてもらった」というのが正しい説明のはず。そこらあたりの説明が少し甘いのでは……？

## タイムスリップのメインは昭和21年

この映画がまず東京オリンピックの昭和39年にタイムスリップさせたのは、実は一種の予行演習にすぎないもので、本来のタイムスリップの舞台は昭和21年、敗戦直後の闇市の時代にあることがすぐに明らかになる。その時代の主人公が、真次の父親であるアムールこと小沼佐吉。私はまず、つい3日前の10月25日に『7月24日通りのクリスマス』で中谷美紀をお相手に完璧な王子様役を演じていた大沢たかおが、ヒゲぼうぼうの姿で荒々しく生き抜くソ連からの引揚兵に大変身しているのに驚いたが、その熱演ぶりはお見事。そんな時代にネクタイ・スーツ姿で、絹の下着をいっぱい詰め込んだトランクを持った真次がいきなり登場したのだから、佐吉が彼に目をつけたのは当然。その2人の間にどんな会話が交わされ、どんな事件が起きるのか、それがこの映画のお楽しみの1つ。さらに、それに華を添えるのが佐吉の愛人お時（常盤貴子）。髪に派手な黄色のリボンをつけ、真っ赤なドレスを着て登場するお時が、佐吉と組んでヤバイ仕事を堂々とこ

なすその肝の据わり方も大したものなら、存在感タップリのその演技もお見事。

### 第3のタイムスリップは非常識！

轟音をたてて走りゆく地下鉄と共に、再三再四タイムスリップする体験をすることになった真次が、さらに昔にタイムスリップしたのは戦時中の日本。昭和何年か特定されていないが、そこにはこれから戦地へ向かうまだ初々しい佐吉がいた。「祝出征 小沼佐吉」と書かれたたすきを肩にかけた佐吉と真次が出会ったのは、乗客として乗っていた地下鉄の中に、佐吉が乗り込んできたため。戦後の闇市で大活躍している佐吉を知っている真次が、佐吉に対して、「きっと生き残ることができる」と励ましたのは当然かもしれないが、ホントはこれってルール違反……？

地下鉄の中で交わされる2人の会話はそれなりに興味深いものだが、問題はそんな状況設定。いくら『地下鉄に乗って』というタイトルだといっても、戦時中の日本に地下鉄を走らせたのはあまりにも非常識では……？ これでは、「日本史」を学んでいない高校生たちがこの映画を観ると、こんなインチキを本気で信じてしまう危険性も……？

### 次第に明かされていく真実は……？

真次のタイムスリップの頻度が多くなるにつれて、不思議なことに真次は恋人のみち子にタイムスリップの現場で会う回数も増えていった……。これには何かワケがありそうだが、それはラストに近づくにつれて明らかになっていく。

現在を生きている人間が再三再四過去にタイムスリップすれば、それまで知らなかったさまざまな情報に出合えるのは当然だが、人間は必ずしも情報が多ければ多いほどいいというわけではないところがミソ。つまり、知ってよかったと思うことがある反面、知らなかった方がよかったと思う真実も……。以下、ネタバレになる危険を承知のうえで、その点に触れておきたい。

### 知ってよかったことは……？

この映画のハイライトは、戦争直後の混乱期を経て、今やお腹の大きくなった

お時が経営している「バー・アムール」における真次とみち子そしてそこに佐吉を交えた「四者会談」のシーン。といっても、それは意図したものではなく、真次とみち子の2人が店を訪れ、お時手づくりのオムライスを食べながら話しているところに佐吉が入ってきたため実現したもの。そこで明らかになるのは、第1に佐吉が見せる長男昭一を死亡させたことへの深い悲しみの姿。昭一の死体を見るなり「何てザマだ！」と吐き捨てるように言い放って出ていったひどい父親を見限っていた真次だったが、それまで全く知らなかったそんな父親の真実の姿を見た後は……？

### 知らない方がよかったのは……？

「四者会談」の中、長男を失った悲しみを語っていた佐吉だったが、その次はお時のお腹の子供に呼びかける言葉に……。 「今度はきつと女だ！」 「名前はみち子だ。ひらがなの方が簡単でいい……」 との佐吉の言葉に「まだ早いよ、女と決まったわけじゃないから……」 と受け流しながら、お時もまんざらではなさそう……。そして、これを聞いていたみち子の目からみるみるうちに涙がこぼれ落ちていったのは当然……。

しかし、みち子が佐吉とお時との間に生まれた子供であるということは、真次とみち子は腹違いの兄と妹……？ そうすると、そんな2人が恋人同士というのはいくら何でもまずい……。やはり、世の中には知らない方がいいこともあるのでは……？

### 父親と息子の和解は……？

長男が死亡し、次男真次が家を飛び出して絶縁状態になった後、大企業となった佐吉の会社で父親を補佐していたのは三男のみ。「今度はホントに危ないから見舞いに来てくれ」とさかんに連絡をしてくる弟に対して、「行く必要ない」と頑なな姿勢を貫いていた真次だったが、再三のタイムスリップの中で、父親の真実の姿を見た後は……？

死を迎えようとするベッド上の父親に対して、「兄はあなたの息子で幸せでした」と真次が語りかける姿は、父親と息子の和解を象徴する感動的なシーン、の

はず……。私は別にそれにケチをつけるつもりはないのだが、それってあまりにもチョロすぎるのでは……？

## なぜ、みち子は……？

おっと、その前にもう1つ私には理解できないし、納得できないことが……。それは、真次からもらった指輪をそっと真次のスーツのポケットに返したみち子が、四者会談終了後にとった行動。すなわち、みち子はいきなりお腹の大きいお時に抱きついていったかと思うと、その直後に大きくバランスを崩して石段の上から2人ともゴロゴロと転がり落ちていったから、さあ大変！ これは、はっきり言って自殺……？

既に四者会談に臨む前にみち子の決心は固まっていたようだが、なぜみち子はそんな行動を……？ 考えられるのは、腹違いの兄妹間での恋人関係を清算するためには、自分が身を引くしかないということ……？ しかし、それって少し理屈がおかしいのでは……？

## 楽しげなラストシーンにも疑問が……？

これだけ何度もタイムスリップを重ね、いろいろな時代の父親小沼佐吉の姿とお時の姿を見てきた真次には、何が真実だったのか、そして自分はこれからどう生きていかなければならないのかということが、すべてははっきりと見えてきたのかもしれない……。そう考えなければ、この映画のラストシーンは理解できないもの。すなわち、この映画のラストシーンは、真次が息子と楽しげにキャッチボールをするシーン。

しかしそこに至るについては、みち子の死亡という痛ましい事件があったはず。一緒にタイムスリップをして昭和のあの時代、この時代を共に体験したみち子が突然いなくなったにもかかわらず、その喪失感や空白感を全く見せることなく、真次が楽しげに息子とキャッチボールをしているのは一体なぜ……？ そして、みち子の死亡とこの楽しげなラストシーンとの整合性は……？ 私には大いに疑問が残るのだが……。

2006(平成18)年10月31日記